

国際社会の歴史的変動と
セミナー・ハウスの役割東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄

一昨年四月に北京で起った空前の民主化運動は、六・四「血の日曜日」事件という深い傷を中国社会にもたらした。その惨劇に世界の人びとは驚き、怒り、そして悲しんだ。しかし、別の角度から眺めると、中国のその悲劇が東欧を救ったのであり、中国とは対照的に、しかも中国の悲劇の代償として、ルーマニア以外では一滴の血を流すことなく、東欧社会主義は崩れていった。私自身、天安門事件に関して全力投球で短時間のうちに著書を書き下したのちに東欧へ行き、ベルリンの壁が崩壊する直前の東ベルリン、フンボルト大学で中国問題のセミナーをやった。カール・マルクスにもゆかりのあるフンボルト大学の知識人たちは、当時、東ドイツがホーネッカー独裁体制下であり、中国の民主化抑圧を支持する立場だったので、東ドイツの民主化・自由化が始まると東ベルリンで第二の天安門事件が起きはしないかと真剣に恐れていた。しかし、ホーネッカー議長は、鄧小平氏の轍を踏むことなく、みずから城を明け渡したのである。

東欧が社会主義から脱して西側化したことは、昨年九月上旬のドイツ統一をも

たらし、ヨーロッパは見る間に大きく変わったが、このような歴史の変動がソ連のベレストロイカにも影響を与え、ソ連社会もいまや大変動期にさしかかりつつある。一昨年十一月にはそのようなソ連の科学アカデミー極東研究所に招かれて講演したあと、モスクワから北京へ飛んだ。いまだ戒厳令下の北京は天安門事件の爪痕も生々しかったが、中ソ関係はさらに積極的に改善されようとしていた。

ソ連の側も東欧が急激に変動し、共産党体制解体の動きがすでにモンゴル人民共和國にまで及んでいるだけに、ますます中国まで東欧化してほしくないと本音では思っている。中国や北朝鮮が社会主義を断固として擁護すると唱えていることが、この点でソ連にいわば安心感を与えているといえよう。

社会主義といえはカストロ首相率いるキューバが強硬な原則論を堅持していたが、そのキューバでさえもいよいよ政治改革を進めようとしており、そうなるに残るのはいよいよ中国と北朝鮮ということになってきた。その北朝鮮へは昨年五月のメーデーの時期に一週間訪れた。平壤では北朝鮮のルーマニア化の可能性まで含めて、北朝鮮の指導層の人びとと長時間論じあったが、「チュチュ（主体思想）」を護持する金日成、金正日父子権力下にある北朝鮮は、一種の「宗教国家」であり、様々な点で社会主義というより

むしろ儒教的権威主義体制ではないかと思われた。しかし、その北朝鮮も中国も

いよいよ革命第一世代指導者の退場期をまもなく迎える、その時期を経て、社会主義の一元独裁体制は、中国でも北朝鮮でも、やがてに崩れてゆくではあるまいか。

このように、一昨年から昨年にかけては、社会主義解体の方向に歴史が大きく、しかも根本的に変化した。

このような歴史の変動に立ち合えたことは、大変に臨場感を伴うことであった。この間、当大学セミナー・ハウスは、さらに発展し充実してきている様子でありとても喜ばしい。開館二十周年記念のインターナショナル・ロッジも多くの方々の御努力で見事にオープンした。私は運営委員の末席にありながら何もできなかったけれど、一つだけ協力させていただけたいことがある。それは、「インターナショナル・ロッジ」という名前についてである。と言っても、別に特別なネーミングでもないし、私がたまたま運営委員会で発言した名称が合意を得たにすぎないのだが、そのとき「ロッジ」という言葉が出てきたのは、いまからもう半世紀も以前に私が最初に参加した国際会議、アメリカのウイリアムズバーグで開かれた「日米円卓会議」（日本側は亡き松本重治氏を団長に故笠信太郎氏、故桑原武夫氏、アメリカ側は亡きライシャワー氏やD・リースマン教授、R・スカラビーノ教授ら）のときの宿舎がなんと「ロッジ」だったことを思い起こしていたから

であった。

当セミナー・ハウスのインターナショナル・ロッジも立派に竣工したのでさらに充実したセミナーが開かれるようになるであろう。私も十年程前まで、国際プログラム委員会の委員長として国際学生セミナーをお手伝いさせていたのだが、ある冬の日の光景がいまも脳裏に焼きついている。連日連夜のセミナーで全員が精力を出し切り、しかも途中、指導教授と学生とのあいだのトラブルがあつてかなり緊張した。しかしそれらがすべて克服され、最後には当事者だったA大学の女子学生Bさんのピアノ伴奏で蛍の光の大合唱となった。思わず目頭が熱くなって大食堂の窓外をふと眺めると、雑木林を透して富士山が実に美しかった。

このような私自身の体験を含めて、当ハウスのプログラムは、まさにインター・キャンパスのユニークなものなのだから、ここでの受講が正規の授業同様の単位として各大学で認められるようにすべきであろう。文部省の基準も最近では社会情勢に対応してかなり柔軟になりつつあり、大学設置基準さえ見直されつつあるのだから、運営委員会で検討していただき、まず私大を対象に、働きかけてみてはどうだろうか。

当ハウスの事情に精通された岡宏子・新館長のエネルギーシユな御手腕に大いに期待したいと思う。

（'90・10・30記。但し文中の年は91年を基点に改めました——編集者）

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'91冬



|| 第153回大学共同セミナー ||

● 日本人は「豊かな社会」を作れるか

|| 第17回国際学生セミナー ||

● 地球時代の生き方を求めて — 開発と環境 —

● 新春随想 「場」としてのセミナー・ハウス

● 国際社会の歴史的変動とセミナー・ハウスの役割

